
漆黒、恐怖、電子、特別編

ゼクス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒、恐怖、電子、特別編

【Nコード】

N2904Y

【作者名】

ゼクス

【あらすじ】

此処は《漆黒の竜人》、《始まりに舞い降りし恐怖の根源》、《電子の獣と少女達》の作品の特別編の場です。三つ作品の特別編は全て此方に載せます。（近々、此方に《漆黒の竜人》の特別編は移転します）

第一話 召喚（前書き）

作者のゼクスです。

今回投稿する特別編以降、特別編は全て此方に載せます。また、漆黒の竜人に載っている特別編も近々全て此方に移転します。

それと今回投稿する作品は、携帯から投稿です。

第一話 召喚

何処とも知れる空間。

その空間の中を漂う意識が存在していた。それはゆっくりとゆっくりとまどろむように意識の覚醒の兆候を繰り返すが、それは完全に覚醒することなく、ただ静かに眠りと目覚めの狭間を行き来し続けていた。

それは覚醒寸前に至る瞬間の間で、何時自身の意識は完全に覚醒するのかと疑問を持ち続けていた。

今回も再び眠りの淵に落ちてしまふのかと考えていると、どこからともなく調子に乗ったような、まるで遊んでいるかのような声が届いて来る。

「――閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。繰り返すつどに、四度……あれ、五度？……え」と、満たされるトキを――破局する。

（……………クスクス……………オモシロイ……………シラナイコトガ……………アツタンデスネ……………オモシロイッ！）

ソレは流れ込んで来た声と知識によって目覚めてしまった。

本来は目覚めないはずの存在が、刺激を受けたことによって覚醒してしまった。

そしてソレはゆっくりと聞こえて来た声の方向に意識を動かし、それは現世へと現界してしまう。

現世に存在するとある一軒家。

その家に住んでいた住人は、突如として襲って来た快樂殺人者――

雨生龍之介^{うせいりゅうのすけ} - によつて末っ子一人を残して殺害された。更に龍之介は自身の実家に存在していた書記を使つて、儀式的な殺人を敢行したのだ。

ソレは本来ならばただの異常な殺人劇で終わるはずだった。だが、今龍之介が居る地ではとある魔術儀式が行われた。更に龍之介には先祖から伝わっていたその儀式に関わる為に必要なモノが備わっていた。

故に偶然にも全てが揃つた状況でイレギュラーが重なり、龍之介はその魔術儀式に参加する為に必要な存在 - サーヴァントの召喚に成功してしまった。

「問いますよ」

龍之介が家に住んでいた男女とその二人の長女の血で遊びで書いた魔法陣から立ち込めていた霧の中から女性の声が響き、龍之介は霧の中から現れた人物の姿に目を見開いた。

人が本来ならば持てる筈が無い透き通つた蒼い髪をポニーテールに纏め、まるでルビーをそのまま埋め込んだように輝く紅い瞳。凡そ自然で出来たとは思えないほど整つた容姿と顔。その身に纏っている服は汚れ一つ感じさせない綺麗な白衣。

幻想的と呼べるその姿に龍之介が言葉を失っていると、魔法陣から現れた女性は龍之介に問いかける。

「私をキャスターの座へと呼び、現界させた召喚者・・・いかなる理由で呼んだのでしょうか？」

「・・・えと、雨生龍之介です。職業はフリーター。趣味は人殺し全般。子供とか若い女が好きです。最近は基本に戻つて剃刀に凝っています」

「人殺し？」

龍之介が告げた事実深く関わっている人物でなければ気がつかない程度に女性は眉を顰め、部屋の中を見回す。

部屋の中には惨殺されたこの家の主達とその子供と思わしき長女の亡骸が存在し、更に部屋はその人物達の血で壁が塗りたくられていた。更に自身が現れた魔法陣に目を向けてみると、召喚された影響で焼き焦げていたが殺された人物達の血で描かれていた事実につく。

女性は心の底から不快そうに眉を顰めるが、呼び出した当人である龍之介は女性の变化に全く気がつかず、部屋に隅の方を輕瓢^{けいひょう}に手で示す。

「まあ・・・小難しい話はおいておいてさ・・・アレ、食べない？」

「フーーーーッ!!」

龍之介に手で閉められた子供・この家の末っ子で今は猿轡とロップで拘束されている・は、恐怖からか必死に身を捻り始める。

女性はその子供を確認すると、ゆっくりと白衣の中に手を入れる。龍之介はその様子に何かが起きると漠然と思いながら女性の一挙一動を見逃さないように注視した瞬間、龍之介の首に前触れも無く注射器が突き刺さる。

「ーーーーッ！」

「・・・・えっ？」

突如として自身の首に刺さった注射器に龍之介は呆然と声を出す。が、次の瞬間、その身を信じられないほどの激痛が駆け巡り、同時

その事実にも男の子は恐怖から大粒の涙を零しながら、床を這って逃げようとするが、女性はゆっくりと男の子に手を伸ばし、その身を縛っていたロープを無言で切り裂く。

「ブザン!!」

「パサッ!

「ヒッ!」

「怖がらせてしまいましたね。残念ですけど、ご両親とお姉さんは助けられません。ごめんなさい・・・せめて今はゆっくりとお休みなさい」

「アッ!・・・」

女性が男の子の額に触れた瞬間、男の子の意識は遠退き深い眠りに落ちた。

それを確認した女性は、ゆっくりと男の子を抱き上げ、フツと部屋の一箇所に置かれていた不可思議な生物を模した銅像に目が行く。

「ああ、これが触媒だったんですか。いや、まさか、異世界移動の実験に使用した銅像がこんな一般家庭に流れ着いて、召喚の触媒に使用されるとは・・・天文学的な確率ですね」

そう女性は呟きながら、左手で棚に置かれていた銅像を眺める。

その銅像は女性が生前実験の為に作り上げた銅像であり、実験の為に使用して行方が全く分からなくなった物品だった。因みに別段何か特殊な素材を使っている訳でも、特殊な機能も存在していないただの銅像である。

多少形はある生物を模しているが、ただの銅像でしかないために放置していたのだが、まさか死後で呼ばれる触媒になるとは女性には夢にも思ってた。なかった。

「さあて、聖杯戦争ですから・・・中々に面白そうですね。ゆっくりと研究させて貰いましょうかね・・・クスクス」

女性・異世界において最も敵に回してはならない人物の二人目として認識されていた人物・フリート・アルハザードはこれから起きる激動の戦いに、久しく忘れていた好奇心を疼かせながら部屋を出て行く。

後日、この家の末っ子だった子供は警察署の前で発見され、警察に保護されて孤児院に最終的に送られたが、少年は成人するまで支援金が送られ、後に警察組織の改革に乗り出す政治家になるのだった。

第二話 参戦（前書き）

様々なご意見ありがとうございました。

全ては無理かもしれませんが、出来るだけ使用を考えてみます。

第二話 参戦

深い闇に満ちた空間。

その空間の主であるフリートは、自身の目の前に存在している複数のモニター画面を興味深そうにそれぞれ眺めていた。

モニターに映っているのは、今回の聖杯戦争の参加者である魔術師とサーヴァント達。召喚されたのは最後だったが、それでもフリートは参加者の誰にも、この地の管理者や古くから住んでいる老獪にも気づかれずに冬木市の陣地化を終えたのである。

そして現在は、冬木市に集結した魔術師とサーヴァント達を自身が作り上げたサーチャーを使用して監視していた。

「ふむ、アサシンのサーヴァントは未だに現存して、マスターは中立地帯で安全を得ていますか・・・それを指示したのは遠坂時臣と言う男・・・そして遠坂が召喚したサーヴァントも並のサーヴァントではないですね・・・ライダーに関してもマスターは未熟そうですね・・・ランサーはマスターが油断と慢心を持っていますから、そこから衝けば切り崩せそうですね・・・セイバーは今のところは様子見ですね・・・ですが、問題はその隣に女性の方でしょう」

フリートはそう呟きながら、モニターの一つに映っているセイバーと共に街を歩いている銀髪に赤い瞳をした女性・アイリスフィール・フォン・アインツベルンに険しい眼差しを向ける。

一目見ただけでフリートには、アイリスフィールが普通の人間とは違っていることに気がついた。

自身の世界に存在していた人工的に作られた人間に近い印象を、フリートはアイリスフィールから感じているのだ。

「うゝむ・・・この世界の魔術師に関する情報が少ないのは不味いですね・・・暫らくは身を隠して情報を収集に徹した方がいいでしょうね・・・ムッ!」

突如として自身が冬木市中に張り巡らしている監視網から魔力の奔流を感じたフリートは、眉を僅かに顰めながら魔力の奔流を放った主が映るモニターに目を向ける。

そのモニターに映っているのは、港場の倉庫街に立っているランサーの姿と倉庫街に身を隠しているランサーのマスターであるケイネス・アーチボルト。

先ほどの魔力の奔流は獲物を誘き寄せするための撒き餌だったのだとフリートは思いながら、丁度いいと内心で考える。

（これは他のサーヴァントの情報を手に入れられる良い機会ですね・・・おや？）

ランサーとケイネスが映っているとは別の他のモニターの映像を目撃したフリートは、映し出された様子に首を思わず傾げた。

先ほどのランサーが発した魔力の奔流によって、次々と他のマスターとサーヴァント達も動き始めていた。他のサーヴァントとマスターの情報を集めているアサシンも含め、フリートを除いた全てのサーヴァントが一箇所に集まろうとしている。

その状況を即座に把握したフリートは、口元を笑みに歪めてゆっくりと立ち上がる。

「これはますます嬉しい状況ですね。クスクス、他の参加者達の情報が一気に手に入るチャンスですよ。それにこの状況は、利用出来ますね」

そうフリートは呟くと共に、何処からともなく刀と小刀を取り出

し、白衣の中に仕舞う。

そのままモニターを消滅させて、ゆつくりとアジトの入り口に向かって歩きながら呟く。

「さあ、て、性格が違う私の顔見せに行きましょうかね」

そうフリートは不穏な言葉を呟くと、サーヴァント達が集結しようとして港場へと向かうのだった。

冬木市のある港場。

その場所が聖杯戦争の本当の意味での初戦の開催場だった。戦っているのは呪符らしき布を巻いた長槍と短槍を握った軽装な装いの端整な男ーランサーのサーヴァントーと、不可視の剣を振るっている蒼いドレスに白銀と紺碧に輝く甲冑を纏った翡翠の瞳の少女ーセイバーのサーヴァント。

二体のサーヴァントは互いに己が持つ武器を相手に向かって繰り出し、それぞれ戦っている相手の実力に戦慄を感じていた。

そしてセイバーとランサーの戦いを見ている者が複数いた。セイバーと共に街を探索していたアイリスフィールに、ランサーのマスターのケイネス。猟犬のように隠れているセイバーの本当のマスターである切嗣とそのパートナーである舞弥。その他にもセイバーとランサーの激闘を見つめている者達がいる。

そして戦いの場から一キロ近く離れた地点の海上で眼鏡を掛けたフリートが、戦場を眺めていた。

（流石は最速と最優と呼ばれている二体ですね。技術に実力、共に超一流ですよ……まあ、本気で戦えば、私の敵じゃないんですけどね）

セイバーとランサー。共に超一流の実力を持った英霊達なのだが、本気のフリートと戦えばセイバーとランサーでは勝てる可能性はゼロに近い。

何せ、フリートの本気とは生前に作り上げた自らの宝具を一斉に使用するという意味だ。そうなれば、それはもう戦いとは言えない。ただの一方的な蹂躪でしかない。

最もフリートにはそれを実行する気はない。己の目的を完遂する為には、今しばらく他の英霊達にも消えて貰う訳にはいかない。何よりも他の英霊達はフリートにとっては、大事な研究対象でもあるのだ。

（フフフツ、やっぱり研究は楽しいですね。生前では結局不可能だった死者蘇生を限定ながらも成功させている聖杯……必ずその原理を手に入れて見せます！！……おや？）

自身が見つめている先の視界で、フリートは一瞬だけ身を隠しながら移動する影を捉えた。

即座にフリートは掛けている眼鏡を操作して、戦いの場に放っていたサーチャーが捉えている映像を右側のレンズに映し出す。

（……やはり、現れましたね、アサシン……。そしてもう二人……。セイバーと共にいる女性の協力者でしょうね……。ムッ！……。マスターでしたか）

コンテナの山の隙間に隠れながら、ワルサー狙撃銃を構えている切嗣の右手の甲に刻まれている令呪を目撃したフリートは、切嗣こそがセイバーの本当のマスターだと確信した。

他のサーヴァントで、未だ発見していないのはバーサーカーとそのマスターだけ。他は全てサーチャーを使用して発見している。状

況から考えて切嗣がバーサーカーのマスターとは考え難い。

（やけに目立つ動きだと思っていましたが、やはり囿でしたか・・・
・少し警戒を強めた方がいいですね。あの男には）

そうフリートは内心で呟くと共に、右手に転送用の魔法陣を発生させ、小さな黄色いバツタを思わせるメカを呼び出す。

ーブーン！

「行きなさい」

ーシューン！

フリートの声と共にバツタはフリートの手から飛び出し、空中で迷彩を行い、宵闇の中に消えていた。

それを確認すると、フリートはセイバーとランサーの方に視線を戻す。

丁度その時にランサーは左手に握っていた短槍を足元に放り捨て、右手に握っていた長槍の呪符を剥がしていた。

ランサーが遂に宝具を使用する気なのだとフリートは悟り、目を凝らしていると、蜃気楼のように凄まじい魔力を立ち上らしている深紅の槍を目撃する。

（フーム。見たところ、大規模な威力を発揮するタイプではなく、ディバイダーと同じ武器その物のが、宝具としての性質を帯びているタイプでしょうね。となると、もう一本の槍にも何かしらの能力が宿っていると考えるべき・・・アレ？もしかして、介入は無理なんじゃ？）

今更ながらに自身が入り込む余地がない可能性にフリートは気がついた。

どう考えてもあのセイバーとランサーの戦いに割ってか入れば、空気が読めない馬鹿としか見られないだろう。しかもその後には、確実にセイバーとランサーの怒りが待っている。

生前に共に過ごした戦いの邪魔をしたら、凄まじく激怒する竜人の存在を思いだしながらフリートは、再び戦いを再開したセイバーとランサーに目を向ける。

(・・・ちょっと、此処で他のサーヴァントが消えるは困りますね・・・まあ、簡単にはどちらも消えないでしょうから、空気が読めない馬鹿が現れない限りは、今回は情報だけで良しとしまし
よう)

当初の予定とは形はかなり変わってしまったが、別段フリートには問題はなかった。

己の思惑通りに進まない事など世の中には溢れている。寧ろフリートにとっては、己の予想通りに進む方がつまらない事が多い。予想通りに進んでも楽しい事は確がある。

だが、フリートにとっては予想外こそが楽しいのだ。故にフリートは自身の目論見が崩れても対して気にせず、セイバーとランサーの戦いを観戦する。

そして二体のサーヴァントの戦いを見つめていると、ランサーが突き出した深紅の槍によってセイバーが振るっていた不可視の剣が一瞬だけ真の姿である”黄金の剣“を晒す瞬間を目撃する。

(・・・今は・・・なるほど、ランサーの持つ深紅の槍の効果は、”魔力遮断”。効果が及ぶ範囲は、槍の刃辺りまで・・・危険度はディバイダーほどではないですけど、もう一本の槍の効果次第では危険ですね)

冷静にフリートはランサーが持つ宝具の力を分析する。

ランサーが振るう深紅の槍の効果は、一般的な魔術師には脅威だが、フリートにとってはさほど脅威ではない。生前には魔力を無効化や遮断する技術は存在し、その全てをフリートは使いこなせる。

寧ろフリートが気になるのは、深紅の槍を解放する時に捨てた短槍の方だった。

（恐らくランサーが短槍を捨てた事自体が罠でしょうね。”槍は本来ならば両手で一槍が基本”。ですが、確か居ましたね。聖杯が送って来た知識の中に、魔を断つ赤槍と”呪いの黄槍”を振るう英霊が）

フリートはランサーの正体にたどり着いた。

フィオナ騎士団、随一の戦士。”輝く貌かおのデイルムッド・オディナ。それこそが今回の聖杯戦争でランサーのサーヴァントとして召喚されたランサーの真名。

（フム、かなり私の初戦の相手に相応しいんですけど・・・誰か居ませんか、空気が読めない馬鹿）

ーピーピッ！

（ん？）

突然に音を鳴らした眼鏡にフリートは訝しみながら、眼鏡を操作してみる。

すると、雷鳴を鳴り響かせながら空中を疾走する二頭の遅しくも美しい牡牛が牽いている戦車に乗った巨漢の男が、セイバーとランサーが戦っている場所に向かう姿が、右側のレンズに映し出された。

「……………いきましたね、空気が読めない馬鹿が」

真っ直ぐに戦車に乗ってセイバーとランサーが戦っている地点に向かう巨漢の男―ライダーのサーヴァントの姿に、フリートは呆然と呟いた。

確かに誰かに介入して欲しいとは思っていたが、まさか本当に空気を読まずに介入して来る人物がいるとはフリートとは思っても見なかった。

しかしこれで、当初の目論見通りに事が運べるとフリートは笑みを浮かべながら、白衣の中から薬が入った小瓶を取り出す。

「……………目的完遂の為とは言え、この薬の効果が消えた後は、凄く嫌なんですよね…………でも、仕方ありません！！我慢しましょう！！」

――ゴクンツ！

意を決すると共にフリートは持っていた小瓶の中身を飲み干した。

港場。その場所はセイバーとランサーの激闘によって見る影もないほどに荒れ果てていた。

それを行った張本人達であるセイバーとランサーは互いに油断なく睨み合っていた。

しかしセイバーは本来ならば両手で握る筈の剣を右手だけでしか握っていなかった。ランサーが仕掛けた策にまんまとセイバーは引っ掛かり、ランサーの二つ目の宝具である”癒えぬ傷を負わせる”

黄色の短槍―必滅の黄薔薇―によって、左手の腱が断たれしまった。
故にアイリスフィールの治療魔術を使用しても傷は癒えず、ランサーが消滅するか、必滅の黄薔薇が失われない限り傷は癒えない。
左手を奪われてしまったセイバーは歯噛みしながらも、目の前にいる好敵手であるランサーと睨み合っていると、突然に雷鳴が轟く。

――ガアアアアアンツ！！

「ッ！………戦車？」
チャリオット

雷鳴を轟かせ、紫電をまき散らせながら夜空を疾走してくる戦車の姿にアイリスフィールは啞然として驚愕を口にする。

セイバーとランサーも突然の戦車の出現に緊迫しながら戦車を見つめると、戦車は丁度セイバーとランサーの真ん中に降り立つ。

それと同時に御者台から威風堂々と巨漢の男が立ち上がる。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！！」

巨漢の男は先ほどの雷鳴に負けないほどの大音声で叫び、凄まじい気迫が宿った炯々たる瞳でセイバーとランサーを見回す。

無論、セイバーとランサーは現れた男の気迫には全く怯まず、自分達の勝負に水を差した男に険しい視線を向けると、巨漢の男はとんでもない事を叫ぶ。

「我が名は征服王イスカンダル！此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

その宣告にこの場に居合わせた全員が呆気にとられた。

聖杯戦争において真名は攻略の要になる重要な要素。自らの真名を堂々と名乗り上げる者など初めてだろう。

誰もが呆気にとられて言葉を失っているなか、最初に復帰したのは御者台の中でうずくまっていたライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットだった。

「何を・・・考えてやがりますかこの馬鹿はあああつ！！」

「――ベシッ！」

「ギャフッ！」

錯乱あまりに掴みかかって来たウェイバーをライダーは無言でデコピンを食らわせて黙らした。

そのままライダーは何事もなかったように、左右にいるセイバーとランサーを見回しながら問いかける。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが、矛を交える前に問うておくことがある。うぬらが聖杯に何を期するかは知らぬ。だが、今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか」

「貴様・・・何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うとな・・・ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はない？さすれば余は貴様らを朋友として、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

そのイスカンダルのあまりの突拍子もない提案に今度こそ誰もが言葉を失った。

セイバーは怒りすら忘れて呆れかえり、対面にいるランサーは話についていけず途方にくれていた。彼らが参加しているのは、文

字通りの戦争である。

それなのにイスカンドルは、いきなり現れ真名を名乗り、あげくの果てには矛さえも交えていないのに従えと宣告して来たのだ。

英断なのか愚拳なのかは、判断しづらいがこの場においては愚拳に近かった。

「・・・先に名乗った心意気には感服せんでもないが・・・その提案には承諾しかねる」

そうランサーは刃物のように威嚇的な眼孔をイスカンドルに向けてながら話す。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓い交わした新たな主君ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「そもそも、そんな戯言を述べるために、貴様は私達の勝負に水差したというのか？」

ランサーの宣言に続くように不愉快そうに眉を動かすセイバーが問いかけた。

生真面目な彼女にとっては、ライダーの提案は許しがたいことだった。

「戯れ事が過ぎたな征服王。騎士として許し難い侮辱だ」

「ムウツ・・・・・・待遇は応相談だか？」

「くどい!!」

なおも言い募るライダーを、セイバーとランサーは一蹴した。

更にセイバーは憮然としたまま言葉を付け加える。

「重ねて言うならば、私もまた一人の王としてブリテンの国を預かる身だ。いかな大王と言えども、臣下に加わる訳にはいかない」

「ほう？ブリテンの王とな？……こりや驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

「……その小娘の一太刀を浴びてみるか？征服王」

言葉と共にセイバーは剣の構えをライダーに向かってとる。
並々ならぬセイバーの闘気にライダーは困ったように眉をしかめて、深く溜め息を吐く。

「こりやー交渉決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

「ら、い、だああああ」

ライダーが残念さ満ちた声で呟くと同時に、腫れあがった額を押さえながら、どん底まで掠れた声をウェイバーはあげた。

「どうすんだよお。征服とか何とか言いながら、けっきょく総スカンじゃないか……オマエ本気でセイバーとランサーを手下に出来ると思っていたのか？」

「いやまあ、”ものは試し”と言うではないか」

「”ものは試し”で真名をバラしたンかい！！」

あまりの事実 zu ウェイバーは逆上して、ライダーの胸鎧をポカポ

力と連打しながら泣きじゃくった。

その哀れさを誘う光景にアイリスフィールは、軽蔑したものか同情したものか悩んでいると、低く地を這うような怨嗟に満ちた声が鳴り響く。

《そうか、よりもよって貴様が》

「あ……う……」

聞こえてきた憎悪に満ち溢れた声に、ウェイバーは声の主の正体とその理由に行き着き、身体が凍りついた。

ウェイバーは聖杯戦争に参加するに至る経緯の中で、今憎悪の声を隠れながら上げている人物から、イスカンドルを召喚する為の聖遺物を盗みだした経緯があった。

最終的にはイスカンドルの召喚に成功したが、聖遺物を盗まれた人物がウェイバーを許す筈がない。

《いったい何を血迷って私の聖遺物を盗みだしたのかと思ってみれば、よりもよって君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ。ウェイバー・ベルベット君》

「あ……ああ……」

《残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才には、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられたはずだったのにねえ》

自身が放つ敵意によって恐懼に固まっているウェイバーに、ぞつとするような冷やかな猫なで声で、隠れているランサーのマスターは、さらに声を続ける。

《致し方ないなあウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味。その恐怖と苦痛を余すところなく教えてあげようではないか。光栄に思いたまえ》

そう声の主は、恐怖に身を竦ませているウェイバーに声をかけた。真の魔術師たることは、死を観念することに他ならない。その意味を言葉の上でしか理解していなかったウェイバーは、今こそ身に染みて味わっていた。隠れながら自身に殺意を向けている人物の視線は、それほどまで致命的だった。

だが、この時に隠れているランサーのマスターは決定的な勘違いをしていた。ウェイバーに言った言葉は、自身にも降りかかることに全く気がついていなかったのだ。後に彼は自身が言った全てをその身、彼などでは足下どころか、爪一つ及ばない人物に骨の髄まで絶望を染み込ませてしまうのだった。

最もそんな未来が待っていると知らないランサーはマスターは、恐怖に震えているウェイバーに残虐な視線を向けていると、ウェイバーの肩に優しく力強い手が、ウェイバーの肩におかれる。

――ポン！

「ッ！」

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな」

恐怖に震えていたウェイバーを支えるようにはライダーは、ウェイバーの肩に手をおきながら、いずこかに潜んでいるランサーのマスターに向かって、底意地の悪い憫笑を向ける。

「だとしたら片腹いたいもう。余のマスターであるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

そのライダーの言葉と共に沈黙が降り、姿無き者の怒りの気配だけが夜気を伝播する。

ライダーはその気配に剛胆に大笑すると、今度は誰にともなく夜空に向かって大音声で張り上げる。

「おいこら！！他にもおるだろが。闇に紛れて覗き見をしている連中が！！」

「……………どういうことだ、ライダー？」

いきなりのライダーの叫びに、セイバーは怪訝な声で質問し、ランサーも怪訝な顔する。

するとライダーは満面な笑みを浮かべながら、親指を立てて示す。

「セイバー、それにランサーよ。うめらの真つ向切つての競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては惹かれて出て来た英霊が、よもや余ひとりということはあるまいて」

ライダーのその宣言にアイリスフィールは、潜んでいる切嗣のことが看破されたのかと肝を冷やす。

しかし、どうやらライダーの意中には他のサーヴァントしかなく、再び辺り一面に轟き渡れとばかりに、大声で呼びかける。

「情けない。情けないのう。冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーはマスターが見せつけた気概に、何も感ずること

がないと抜かすか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するというのは、腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなあ。んん！！」

ライダーはそのままひとくさり豪笑を放つと、不敵な笑みで口元を歪めながら、挑発的な眼差しを周囲の闇に向けて叫ぶ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！此处に集うがいい！なおも顔を見せぬ臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものとしれ！！」

そのライダーの大熱弁に、ソレは即座に応じた。

《グオオオオオオオオオオオオッ！！！！》

「又ウ！？」

突入として海の方から響き渡ったライダーの大音声の叫びさえもかき消してしまうほどの叫びに、ライダーは海の方に目を向ける。セイバーとランサーも先ほどの叫びはただごとではないと慌てて海の方に目を向けると、ソレはゆっくりと上空を旋回していた。ソレの姿を目撃した誰もが言葉を失い、呆然とアイリスフィールドが呟く。

「……………ま、まさか……………そ、そんな！？」

「う、嘘だろう……………誰が、誰が……………アレを……………呼び出したんだ」

「グルウウ！！」

アイリスフィールとウェイバーが現れたソレに掠れた声を出している、ソレは低い唸り声を上げながら、ライダー達を上空から見下ろす。

全長約十メートル以上の大きさを持ち、長い尾を揺れ動かし、赤い鱗で全身を覆った巨大な翼を羽ばたかせている生物。幻想種の頂点に位置する象徴。

魔術師、サーヴァントが絶対に見間違えることがない神秘が彼らの目の前にいた。

「「りゅ、竜種!?!」」

「グオオオオオオオオオオオッ!!」

驚愕に満ち溢れたアイリスフィールとウェイバーの叫びに応じるように、赤き竜は放声を辺りに轟かせた。

その凄まじい放声によって、衝撃波が巻き起こり、セイバーはアイリスフィールを守るように立ち、ライダーはウェイバーの襟を掴む。

その様子を竜は愉しげに眺め、口に魔力を集めようとする直前に、竜の背から声が響く。

「止めよ。今日は挨拶だけで訪れたのだ。お前の炎で終わらせるのは、つまらん」

「グルウウ」

背から聞こえてきた声に、竜は口を集めようとしていた炎を霧散させた。

ライダー達はその竜の動きに、竜を操っている者が背にいたと思つて目を向けると、美しく輝く蒼銀の鎧に身を包み、腰に刀と思わ

しき武器を帯刀した女性が存在していた。

その女性は長い蒼い髪をポニーテールにしてまとめ、冷たい色をした紅い瞳をライダー達に向けながら手綱を握っていた。

「あいにくと、真名の名乗りは封じられているで、代わりにクラス名で我慢して貰おう。私のクラスはキャスター。聖杯戦争で最弱のクラスだ」

そう女性は――明らかに性格が変わっているフリートは、皮肉げに自身のクラスをライダー達に告げながら、竜の背に乗ったままライダー達を見下ろすのだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・出遅れた」

竜の背に乗ったフリートを見つめるライダー達の背後で、寂しげに呟く、街灯のポールの頂点に立つ黄金の英霊がいたが、誰も気がついていなかった。

第二話 参戦（後書き）

今回使用宝具

名称：《見通す魔鏡》

ランク：D

分類：対人宝具

詳細：形は一般的な眼鏡の形をしているが、ありとあらゆるセンサー機能が備わっている。最大百キロ先まではつきりと見え、フリートが作成したサーチャーが捉えている映像も常時見ることが可能。また、視覚からに対する幻影や精神に影響を及ぼす何らかは全て無効化される。

名称：《小バッター一号機》

ランク：E

分類：対人宝具

詳細：対象にした人物を常に監視し、動きを使用者に常に報告する。大きさは手のひらサイズの上に、隠密能力に秀でている。また、自爆機能が備わり、万が一見つかったら、対象者に取り付き自爆するので、決して発見してはいけない。

なお、爆発の威力は人が跡形もないほどに変わり果てる威力だが、周りには全く影響が起きないように結界が自動で展開されるので、”周り”は安全である。

名称：《性格変化薬》

ランク：D

分類：対人宝具

詳細：一定時間使用者の性格を変えてしまう秘薬。しかし、使用者は性格が変わっている間の記憶を全て覚えているので、自分らしくない言動に正気に変えた後に苦しむ。

また、福次効果として、既に精神を変えている影響で洗脳や魅了などの効果は通じない。

第三話 集結（前書き）

活動報告の方にあるフリートのサーヴァントステータスに追加を加えました。

ご意見をくれた方々ありがとうございます。

本編の方は今しばらくお待ちください。

第三話 集結

聖杯戦争に参加する魔術師達が出来ることならば呼び出したくないサーヴァントのクラスが、二つ存在している。

一つは狂戦士のクラスであるバーサーカー。基礎能力が低いサーヴァントを強化するクラスだが、その代わりに他のサーヴァントのクラスに比べて消費魔力は数段勝り、何よりも制御することが最も難しいクラスなのだ。故に聖杯戦争で必勝を確実に狙うのならば、かなり大博打を打たなければならぬ難しいクラス。故に大抵の魔術師は好き好んでバーサーカーのクラスをまず呼ばない。

そしてもう一つの呼び出したくないサーヴァントのクラスがキャスター。魔術師のクラスだった。

その理由は、他のクラスであるセイバー、ランサー、アーチャーの三騎士と呼ばれるクラスにあった。前述した三つクラスには対魔力のスキルが保有される。このスキルは魔力を用いる攻撃を無効化してしまうスキルな為に、どうしても魔術に頼って攻撃してしまうキャスタークラスには、セイバー、ランサー、アーチャーと戦う上で圧倒的なハンデが課せられしうのだ。

故にキャスターのクラスは最弱と呼ばれ、召喚されたキャスタークラスのサーヴァントは大抵は陣地作成のスキルを使用して、陣地の中に建て籠もり、向かって来た敵を撃退するのが定石だった。

だが、そんな聖杯戦争の定石を粉碎するキャスターのサーヴァントが、赤い竜の背に乗りながら呆然としているライダー達を見下ろしていた。

「やれやれ、何時まで間の抜けた顔している？其処で叫んだ征服王の呼び掛けに応じて現れたのだ。少しは声を出して欲しいな」

「グルウウ」

性格が完全に変わり、何時も来ている白衣とは違って、戦装束である蒼銀に輝く鎧に身を包んでいるフリートの言葉に同意するように、竜は唸った。

その様子にフリートは冷笑を口元に浮かべ、岸壁に聳え立つデリッククレーンに目を向ける。

「やれ」

「グオオオオオオオオオオオオッ!!」

ーードグオオオオオオオンッ!!!!

フリートが命じると共に竜はデリッククレーンに口を向け、閃光がその口から放たれた。

その凄まじい威力にデリッククレーンは破片一つ足りとも残さずに消滅した。

ライダー達はその竜の力に、目の前に滞空している竜は紛れもなく幻想種の頂点に位置する竜種だとはつきり理解した。

しかも今の竜の一撃には余力さえも感じられる。対人宝具ではすまない。対軍、いや対城宝具の域に目の前の竜はいるのだと、その場にいる誰もが理解した。

「フム?.....まだ、呆然しているのか?よしでは、残り”三つ”。隠れて様子を伺っているネズミを撃つか」

「グルウウ!」

「ッ!待てキャスター!」

フリートの宣言に獰猛な笑みを浮かべた竜の姿に、ランサーは慌てて叫んだ。

竜とフリートはこの港場に潜んでいる者に対して攻撃を加えようとしている。

事実、先ほどの攻撃はランサー達は知らない事だが、デリッククレインに潜んでいたアサシンを狙って攻撃したもの。

そして港場にはまだ潜んでいる者達がいる。その中にはランサーのマスターもいる。

故にランサーはフリートと竜の行動を慌てて止める為に叫んだのだが、慌てているのはランサーだけではなかった。

「舞弥！すぐにその場から移動しろ！あのキャスターは、僕らのことにも気がついている！」

《了解！すぐに移動します！》

切嗣の指示にインカムの向こうにいる舞弥は答え、即座にその場から移動を開始する。

通信が切れるのを切嗣は確認すると、自身も隠れていたコンテナから離れようと銃器を片付け、最後にフリートと竜に目を向け、気がつく。

フリートがライダー達に向けていた視線が、何時の間にか切嗣へと向けられ、その口元が冷笑に歪んでいることに。

（ッ！？）

切嗣の全身に怖気が走った。

アレは不味い。アレを野放しにしたら何れ取り返しが出来ない何が引き起こされてしまう。

切嗣の今までくぐり抜けて来た修羅場によって鍛えられた第六感

がそう叫んでいた。

しかし、フリートは切嗣への興味を失ったのか、ゆっくりと視線を外し、握っていた手綱を手放すと、竜の背から飛び降りてコンテナの上に降り立つ。

ーートンッ！

「さて、征服王とやら、一体いかなる用向きでそのような介入を行ってまでランサーとセイバーの尋常な立ち会いを阻んだのだ？ それにあのような他の英霊を臆病者呼ばわりする発言……下らぬ用向きならば、我が契約竜の劫火で焼き尽くしてくれるが？」

「ラ、ライダー！」

「わかつとる！ 安心せよ坊主！」

自身に向かって涙混じりながら叫んで来たウェイバーに対して、ライダーは先ほどセイバーとランサーを勧誘していた時以上の覇気を持って答えた。

ウェイバーはその覇気に満ちた叫びに遂にライダーが本気になったのだと内心で喜ぶ。流石に幻想種の頂点に位置する竜種を従えているような相手を勧誘する気は、剛胆なライダーでも持っていなかったのだと、ウェイバーは安堵の息を吐く。

何せフリートがコンテナに降りたとはいえ、竜は未だに上空に竜は滞空している。対応を間違ったら、即座に火を放って来るのは間違いない。

故に流石にライダーでもフリートは勧誘しないと、ウェイバーは思うが、彼はまだライダーと言う漢を侮っていた。

「そこにいる、キャスターよ！……余の配下にならんか？ 待遇

は相談するぞ！」

——バタツ！

晴れやかな笑みと共に親指を立てながら突き出したライダーの姿に、ウェイバーは倒れた。

他のセイバー、ランサー、そしてアイリスフィールも思わず啞然としながらライダーを見つめ、倒れていたウェイバーが起き上がって叫ぶ。

「お、お前は何を言っているんだ！？ア、アレが見えないのか！？りゅ、竜だぞ！？幻想種の頂点！！竜種なんだぞ！？」

「言われんでもわかつとるわ！余も本物の竜を見るのは、初めてだ」

そのライダーの言葉に、ウェイバーは気がつく。

ライダーの瞳がまるで憧れていたモノを目にしたように光り輝いていることに。確かに竜など言う幻想種の頂点に位置する存在を目撃する機会など、幾ら英霊でもないに等しいだろう。

ウェイバー自身、もしも敵として現れなければ呆然と目の前にいる竜を見つめていただろう。

しかし、残念ながら自分達が参加しているのは戦争であり、目の前にいる竜はフリートの契約竜。敵として現れた存在。

しかもライダーはどう考えてもふざけているとは思えない事を、フリートに告げてしまった。

一体どういふ答えが返って来るのかと、ウェイバーは震えながらフリートに目を向けようとする。

そして背後を振り返ってみると、フリートは額を右手で押さえながら、ライダーを見ていた。

「離れた所で見ていても思ったが……このような男に世界は征服されかけたのか？」

「ハハハハハハハハッ！見よ坊主！竜を従えているキャスターにも、余は感心されとるぞ！」

「呆れられているんだ！」

豪笑しているライダーに向かってそうウェイバーは叫び、その場にいる全員が困ったように困惑していると、突然にフリートは身に着けている鎧の中から一本の笛を取り出す。

そしてそのまま笛を口元に運ぶと、上空に滞空している竜に向かって笛の音を奏で出す。

「――♪♪♪♪♪」

「グオオオオオオオオオオオツ！！………キュル〜〜！」

「か……可愛い」

笛の音と共に竜の身体が光り輝き、光が消えた後には肩に乗れるほどに小さくなり、先ほどまでの獰猛な姿など感じさせない愛くるしい竜が存在していた。

フリートの肩に降り立つ小さな竜の姿に、アイリスフィールは羨望の声を出す、竜はまるでアイリスフィールには目を向けずにフリートに擦りよる。

「キュル〜〜」

「ご苦労だった。しばらくはその姿で休め。そこにいる者の相手に

あの巨体は不利だからな」

肩に乗っている竜を撫でながら視線をライダー達の背後にフリートは向ける。

ライダー達もそれに釣られて背後を振り向いてみると、額に青筋を浮かべた黄金の英霊が街灯のポールの頂上に立っていた。

金色の輝きを発している輝く甲冑の立ち姿に、ウェイバーは思わず息を呑む。

「あいつは……」

昨夜遠坂邸を監視している時に一瞬見ただけだったとはいえ、ウェイバーはポールの頂上に立つ黄金の英霊を見間違えなかった。

間違いなく昨夜、遠坂邸に侵入したアサシンを圧倒的な破壊力で葬り去ったサーヴァントに他ならない。

既にこの場にキャスターであるフリートがいることも考え、更にライダーの呼びかけに応じて現れたのだとすれば、理性を持ち合わせていることになる。それが意味することは、目の前にいる黄金の英霊は狂化しているバーサーカーではないという事実。

となれば、消去法で残るのは、三大騎士クラスの最後の一角であるアーチャー。

フリートを含めたこの場にいる全員が黄金の英霊のクラスを確信していると、アーチャーは青筋を浮かべたままフリート達を見下ろしながら喋りだす。

「我^{オレ}を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜のうちに二匹も湧くだけではなく……我^{オレ}を無視するとは……赦し難き所業」

開口一番、アーチャーである黄金の英霊は声音に隠しきれない怒りを滲ませながら、眼下に対峙する四人のサーヴァントを侮蔑も露

わに見下ろす。

傲然たる態度とその口調は、ライダーの尊大さに近い印象はあるが、根幹から異なっていた。征服王は他者を認めるに対して、王を名乗っているアーチャーは自身以外の他者を対等に認めていない。流石のライダーも自分以上に高飛車な存在の出現に、困惑しながら顎の下を掻く。

「難癖つけられたところでなあ……イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我^{オレ}ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

（つまり、奴の時代には王と呼べる存在は奴一人だったと言うことだな）

もはや侮辱と呼ぶにも度の過ぎる宣言を、さらりと言い捨てるアーチャーを見ながら、フリートは手に入った情報を吟味していた。

もし先ほどのアーチャーの侮辱としか言えない宣言を聞いたのが、本来のフリートだったら不愉快になって、アーチャーに嫌がらせを行っていただろう。しかし、現在のフリートは戦闘者に近い性格になっっているので、アーチャーの宣言は聞き流していた。

最も性格は変わっていても、逆鱗の部分は変わっていないので、もしアーチャーが逆鱗に触れでもしたら、目的を忘れてアーチャー殲滅に乗り出すだろうが。

そんな風に人知れず死刑台に一番近い場所にいると知らないアーチャーに、フリート同様に先ほどの宣言を聞き流したライダーが、溜息を吐く。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？貴様も王

たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？ 雑種風情が、王たるこの我^{オレ}に向けて？」

順当に考えれば、理があるライダーの言い分に対して、アーチャーの真紅の双眸は、更に傲岸な怒りを帯びた。

そこには真名を秘めるという打算はかんじられない。ただひたすらに感情的なばかりの癩癪しか感じられず、黄金の英霊は募っていた怒りを殺意に変えて放出しだす。

「我が拝謁の栄にしてなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

そうアーチャーが断じると同時に、アーチャーの背後の左右の空間が陽炎のように歪む。

次の瞬間に、歪んでいる空間から、眩い刃の輝きが忽然と虚空に出現した。

その正体は抜き身の剣と槍。どちらとも目を奪われるような装飾に彩られているだけではなく、隠しようない猛烈な魔力を放っていた。

明らかに尋常な武器ではなく、宝具としか思えない代物。

それは昨夜、アサシンを一方的に抹殺せしめた時に起きた不可解な攻撃の再現。昨夜、遠坂邸を監視していた者達はそれを理解した。ただ一人を除いて。

（なるほど、アーチャーの宝具の正体。そしてその真名が見えた）

誰もがアーチャーの異様に身動きが取れなくなる中、フリートだけがアーチャーの正体にたどり着いていた。

自身もアーチャーに似た宝具だということもあるが、それよりも

基本的に製作者であるフリートは、ランサー、セイバー、そしてライダーの宝具には在るモノが、アーチャーが出現させた宝具には全く無い事を一目見ただけ見抜いていた。

（あの宝具達には、全く使われた気配がない。ライダー達の宝具には在るのに、あの宝具達にはない。つまり、恐らく宝具として存在が確立される前の代物。”原典”。そしてアーチャーの発言）

ただ一人、アーチャーの力に吞まれることなく、フリートだけがアーチャーの真名を看破した。

バビロニアの王にして、人類最古の王と称される存在。この世の全てを手に入れた王。

”英雄王ギルガメッシュ”。それこそが、遠坂時臣が聖杯戦争を確実に勝利するために呼び出したアーチャーの真名。

本来ならば時臣としては、最も隠して起きたい情報だったが、アーチャーの唯我独尊の行動と、フリートという異常な存在のせいで、初戦で看破されてしまった。

（これで五体のサーヴァントの真名と大体の宝具の力の情報は手に入った。初戦とは考えられん戦果だな。残るは、バーサーカーだけだが、現れないところ考えると、別の機会なり・ムッ！）

「グルウウ！」

突如としてあらぬ場所から吹き荒れた魔力の奔流に、フリートは即座に目を向け、フリートの肩に乗っていた竜は警戒するように唸りながら、魔力の奔流が起きている場を睨んだ。

その魔力の奔流に気がついたのはフリートだけではなく、居並ぶ全員が魔力の奔流の発生地点に目を向け、屈強な人影が実体化する瞬間を目撃する。

セイバーとランサーが戦っていた場所から僅かに離れた地点で実体化した存在は、”影”としか形容出来ない存在だった。

長身で肩幅が広く、一分の隙もなく、底抜けに黒い甲冑で全身を覆い隠し、面貌さえも細く穿たれたスリットから燃える不気味な双眸しか判断出来ない無骨な兜で隠している。

状況から考えれば、新たに現れたサーヴァントは、バーサーカーに間違いない。

此処に聖杯戦争でも、異例中の異例が起きた。フリートが消滅させたアサシンの代わりにやって来た、”新たな三体の隠れ潜んでいるアサシン”を含めれば、初戦にして召喚された全てのサーヴァントが集結したのだから。

しかし、新たに現れたバーサーカーのサーヴァントには、フリートとアーチャー以外の全員が困惑していた。

新たに現れたバーサーカーには他のサーヴァント達がそれぞれ持ち合わせていた”輝き”が全く見えず、ただ”負の波動”しか感じられないのだ。

「……………なあ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなあ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだなあ」

油断なくバーサーカーを見据えながら、揶揄するように質問して来たランサーに、流石のライダーも顔を顰めながら答えた。

黒い騎士姿であるバーサーカーが放っているのは、掛け値なしの殺気だけ。魔力から生じた旋風さえも、怨嗟の唸り声と感じるほどに禍々しい。

ライダーもそんな気配を放っている相手と交渉する気力は涌かず、自身の横にいるウェイバーに問う。

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？アレは」

「……判らない。まるっきり判らない」

「何だあ？貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と”観える”ものなんだろう、ええ？」

英霊と契約しマスターになった者には、他のサーヴァントのステータスを”読み取る”透視力が授けられる。

英霊を招いた聖杯から与えられる、マスターならではの特殊能力。セイバーの背後にいる代行のマスターであるアイリスフィールには不可能だが、ライダーの正式なマスターであるウェイバーには備わっている。

現に目の前にいるセイバー、ランサー、アーチャー、そしてフリートの能力値をウェイバーは把握している。だが、バーサーカーのステータスは。

「見えないんだよ！あの黒いヤツ、間違いなくサーヴァントなのに……ステータスも何も全然読めない！」

「ふむ」

狼狽しきつたウェイバーの弁明に、ライダーは眉を顰めながら、改めてバーサーカーを凝視する。

バーサーカーが纏っている闇色の甲冑には、何の特徴もなく、装着者の素性を判断出来る要素は一切ない。

いや、見れば見るほどにバーサーカーの細部が、ぼやけて、ますます不鮮明になっていく。

その事実にはライダーだけではなく、アイリスフィール、セイバー、ランサーも気がつくと、黙ってバーサーカーを凝視していたフリー

トが呟く。

「なるほど・・・あのサーヴァント。生前はどうやら誰かに扮装した逸話を持った英霊のようだな」

「ムッ？・・・キャスターよ？何か気がついたのか？」

フリートの呟きを耳にしたライダーは、フリートに目を向けた。それは他の者達も一緒なのか、その場にいる全員がフリートに目を向けると、フリートはバーサーカーを見ながら話す。

「あのバーサーカーが纏っている闇は、知ろうとすればするほどに深まっている。つまり、自身の正体を隠して起きたいという逸話から生まれた特殊能力なのだろう。そして僅かに判別出来るところから見て、生前は騎士の類に違いない」

「ほお。僅かな観察で其処まで見切るとは」

フリートのバーサーカーに対する推測に、ライダーは思わず感嘆した。

自分達が全くバーサーカーの素性に関する情報が手に入らないと頭を悩ましていたのに、フリートはほんの少しだけの情報で、バーサーカーの生前に関する事柄を見抜いた。

卓越した知力と分析能力にアーチャーを覗いた全員がフリートに対する警戒を強めていると、バーサーカーがゆっくりと街灯の上に立つアーチャーに身体を向け出す。

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが・・・」

自身に向かっておぞましい視線を向けてくるバーサーカーに、ア

ーチャーは耐え難い屈辱を感じた。

そしてアーチャーの背後に浮いていた宝剣と宝槍が、反転して切っ先がバーサーカーに向けられる。

「せめて散りざまに我を興じさせよ。雑種」

ーードン！ドン！

アーチャーが冷徹な宣告を放つと共に、剣と槍が虚空を走った。

その攻撃は遠距離攻撃を行える者からすれば、杜撰としか言えない投擲だったが、それでも宝具には違いなく、破壊力は絶大だった。まるで発破をかけられたかのように路面は砕け、バーサーカーがいた地点は木っ端微塵に砕けたアスファルトが粉塵となって視界を覆い隠していた。

《……ッ！！》

僅かに粉塵が薄れた瞬間、アーチャーとフリートを除いた全員が息を呑んだ。

舞い上がった粉塵が薄れていく中で、バーサーカーは健在だった。そのバーサーカーが立っている地点から、僅かに逸れた足元に、クレータ状に抉れた路面に突き刺さる槍が存在し、バーサーカーの手には剣が握られていた。

バーサーカーはあの一瞬の間に、自身に向かって飛来した宝剣を掴み取り、獲得した獲物を使って、宝槍を打ち払ったのだ。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

自身が目撃したバーサーカーの凄まじい技巧に、ランサーは張り詰めた声で呟き、ライダーもバーサーカーの技巧には唖るえなか

った。

「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのう」

(さて、いかなる力を使ってあの握っている宝剣を操った)

注意深くバーサーカーを見ながら、フリートはバーサーカーの力を見極めようとする。

宝具とは、そもそも使い手である英霊のためだけに特化した専用の武器。アーチャーやフリートのように特殊な宝具も存在するが、バーサーカーのように手に入れたばかりの宝具を自在に操るなど本来は不可能。

それを実行せしめたバーサーカーも、恐らくは特殊な宝具の類の所持者だと考えながら見極め初める。

(……ん？違う……まさか！？奴の力は！？)

「……その汚らしい手で、我が宝物に触れるとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ!!」

怒りの叫びと共に、再びアーチャーの周囲が揺らめき、新たな宝具の群れが出現する。

その数、十六挺。しかも槍や剣だけではなく、斧、槌、矛、更には用途や素性も知れない奇怪な刃物さえもある。それら全てが正真正銘の宝具。

「そんな、馬鹿な……」

新たな宝具の数々の出現に、ウェイバーは思わず呻いた。

それはアーチャーの真名にたどり着いたフリートを除いた全員が

同じ気持ちだろう。無尽蔵に宝具を所持しているなど、それは異常としか言えない状況。

しかもアーチャーは昨夜の対アサシンの時も踏まえて、同じ武器は使用していないのだから。

「その小癪な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか……さあ、見せてみよ！」

ーードドドドドドドドッ！！

アーチャーの号令と共に、虚空に浮かんでいた宝具の群れが先を争ってバーサーカーに殺到した。

絨毯爆撃と見間違う攻撃。しかし、その攻撃の標的となっているバーサーカーも異常な存在だった。

いの一番飛来した矛を左手で掴み取ったと思えば、握っていた右手の剣と共に縦横無尽に振るい、宝具の洗礼を打ち返した。

その技巧は狂化して理性を失っているとは信じられないほどに、精緻に華麗だった。

「……どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いやつとは相性が最悪だな……おまえさんもそう思うだろう？ キャスター」

「確かに同意見だ。バーサーカーの方は強い武器を拾えば拾うだけ強くなる。アーチャーの攻撃は自ら深みに嵌る一方ではない……・最もあのバーサーカーも”二本”までが限界のようだが」

「なぬう？ ソイツは一体どういう意味……」

ーードゴオンッ！！

フリートの意味深な言葉について質問しようとした瞬間、ひときわ大きな轟音が響いた。

その音にライダーが戦いの場に目を戻してみると、倒壊した建造物の影響で粉塵が立ち込める中で、左手に片刃の曲刀を握り、右手に戦斧を握ったバーサーカーが立っていた。

アーチャーの攻撃を全てバーサーカーは退けたのだ。その証拠にバーサーカーの足元には宝具が散らばっていた。

その実力にセイバーとランサーは戦慄する。いずれ聖杯戦争を勝ち残っていけば、アーチャーとバーサーカーとも矛を交える展開もありえる。だが、どういう処方で立ち向かえばいいのかと悩む。

そして注目されているバーサーカーは、何気になく手元に残っていた二本の宝具を掲げ、予備動作もなくアーチャーに向かって投擲する。しかし、狙いが曖昧だったのか、二本の宝具はアーチャーの足場のポールに向かい、バターののようにポールを寸断する。

――ザンツ！

――ギギギギッ！ドン！

寸断されたポールは地響きを立てながら倒壊した。

そして街灯の頂点に立っていたアーチャーは、街灯が倒れる前に身を翻し、何事もなかったように地面に着地するが、その面貌は凶相に変わっていた。

「痴れ者が……天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ！その不敬は万死に値する。そこな雑種よ、もはや肉片ひとつ残さぬぞ――！」

怒りによって紅蓮に燃える双眸をバーサーカーに向けながら、ア

ーチャーは吼えると共にみたび背後の空間を歪ませて、宝具の群れを呼び出す。

その数は先ほど倍の三十二。流石の今度ばかりはライダーも押し黙った。アーチャーの潜在力は、フリート以外の誰にも計りきれなかったのだ。

そして憎悪に燃える視線をバーサーカーに向け、アーチャーが号令を放とうとした瞬間、その視線はあらぬ方角に転じた。

その視線の先に何が在るのかを悟ったフリートは、アーチャーとバーサーカーの戦いは終わりだと確信する。

「貴様ごときの諫言で、王たる私の怒りを鎮めると？大きく出たな、時臣……命拾いしたな、狂犬」

さも忌々しげに吐き捨てながら、アーチャーは展開していた宝具の群れを納めた。

そのままアーチャーは居並ぶサーヴァント達に目を向ける。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い」

最後まで傲慢な言葉を言いながら、アーチャーは実体化を解き、この場から去って行った。

アーチャーが残していた輝きの残滓が漂う場所を見ながら、ライダーは苦笑する。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほどに豪傑な質ではなかったようだな」

呆れた風にライダーは苦笑しながら呟くが、そんな暢気な場合ではなかった。アーチャーに負けず劣らず脅威であったバーサーカー

が未だこの場にいる。

戦っていたアーチャーの消失によってバーサーカーは、所在なさに双眸をさまよわせ、新たな獲物を見定める。

その標的にされたセイバーは背筋に悪寒が走り、思わず身構えた瞬間、バーサーカーから呻きが放たれる。

「……^アur……^アar……^アur……ッ!!」

全身から殺意を迸らせ、黒い騎士は野獣の如き勢いでバーサーカーはセイバーに向かって突進した。

「■■■■■■■■■■ッ!!!!」

「はあっ!!」

「……ギイイイン!!」

不気味ながらも凄まじい気迫と共にバーサーカーが振り下ろしてきた”得物”を、セイバーは危なげなく不可視の剣で受け止めた。

しかし、受け止めたバーサーカーの武器の正体を見極めて、セイバーは愕然とする。

バーサーカーが振るった武器の正体は、先ほどバーサーカーが寸断した長さ二メートルのポールの鉄屑だったのだ。

そしてそれがセイバーに取っては一番の驚愕だった。

セイバーの振るっている剣は、風に覆われているとはいえ、宝剣の中の宝剣である至高の宝具。

その剣とバーサーカーが持っているただの鉄屑が拮抗している。そんな有りえない事態にセイバーは困惑しながら、バーサーカーが握っている鉄柱に目を向け、ある事実が気がつく。

「なん・・・だと？」

目の前の広がる事実、セイバーは思わず目を疑った。

バーサーカーが手にしている鉄柱には、葉脈のように黒い筋が幾重にも絡みつき、鉄柱全体を覆うように広がっていた。

その黒い筋の起点はバーサーカーの両手。バーサーカーが身に着けている籠手に掴まれた箇所から、蜘蛛の巣状にバーサーカーの魔力が鉄柱全体に浸透していたのだ。

「貴様は！？まさか！？」

「・・・そういうことか。あの黒いのが掴んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

バーサーカーの宝具の正体をセイバーが驚愕と共に理解すると同時に、見守っていたランサーとライダーも同じ結論にたどり着いていた。

バーサーカーの宝具は、槍や剣と言った形ではなく、特殊能力型の宝具だった。しかもその能力は恐ろしい力だった。

何せアーチャーの宝具の支配権を乗っ取るだけではなく、ただの鉄屑がセイバーの持つ宝剣と鍰迫りあうほどに強化してしまうのだから。

アーチャーとは別の意味で、無尽蔵に宝具を持ち合わせている強敵の出現に、ランサー、ウェイバー、アイリスフィールは驚くが、ライダーだけは静かに肩に竜を乗せながら、豪快な槍捌きでセイバーを攻め立てているバーサーカーを見ているフリートに横目を向ける。

（こやつ・・・バーサーカーの宝具を短時間で見抜きおった。余でさえ、セイバーと鍰迫りあえているところを見て漸くたどり着い

たというのに……何者なのだ？)

よくよく考えてみれば、得体の知れない存在がもう一人いたことにライダーは気がついた。

竜という幻想種の頂点を従え、卓越した知力と分析能力を示したフリートもライダーを持つてしても底が見えない。

寧ろ見せている部分さえも、本人からすれば冰山から僅かに落ちる粉雪でしかない印象が感じられる。

そういう風にライダーがフリートに対して疑念を募らせている間にもセイバーとバーサーカーの戦いは続いていた。

しかし、バーサーカーの猛攻の前にセイバーは防戦一方だった。

ここにきてランサーの《必滅の黄薔薇》^{グレイ・ボウ}によって負わされた左手の傷が響いていた。

右手だけの握力でしか剣は振るえず、固有スキルの《魔力放出》でサポートとして何とかバーサーカーの猛攻を応戦の猛攻するのに限界だった。

だが、何時までも凌ぎきれぬ訳がない。しかし、それでも弱みを見せる訳にはセイバーはいかなかった。

傍観に徹しているライダーとフリートへの牽制をバーサーカーとの互角の拮抗で示さなければ、この状況をつけ込まれしまう。

だが、戦っているバーサーカーも相当な手練れだった。手負いとはいえ、最強のサーヴァントであるセイバーに反撃の隙を与えないのだから。

「■■■■■ッ!!」

「貴様は、一体!？」

そのセイバーの質問に対して、バーサーカーは裂帛の気合いと共に鉄柱を振りかぶる。

大技を使い、ガードもろともセイバーの矮躯を叩き潰そうとする。

「■■■■■ッ!!」

「・・・悪ふざけはその程度にして貰おうか、バーサーカー」

「ーザーザンッ！」

セイバーに鉄柱が振り下ろされる直前、一条の紅き閃光が走り、バーサーカーが握っていた鉄柱は半ば辺りで両断された。

それを成したのは、セイバーの前に立つ長槍と短槍の二槍を握った槍兵。

右手に握る赤き長槍―打ち合った魔力を打ち消す力を宿す《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルの切っ先をバーサーカーに向けて構えているランサーだった。

魔力を浸透させて疑似宝具にいかなる物でも変えられるバーサーカーの宝具に対して、ランサーの魔力を打ち消す《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲルは有効な宝具。

ランサーの前では、バーサーカーの宝具は少なくともこの場では無意味に近いモノなのだ。

「そのセイバーには、この俺との先約があつてな・・・これ以上つまらん茶々を入れるつもりならば、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー・・・」

死闘最中ながらも、セイバーには決然と立つランサーの姿に感極まるものがあつた。

ランサーの誇りの形は、まさに彼女が奉ずる”騎士道”に忠実。

しかし、この場にそれを天晴れと評しない者がいた。
それがランサーのマスターだった。

《何をしているランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機である》

「我が主！セイバーは！必ずやこのデイルムッド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします！お望みなら、その狂犬めも先に仕留めて御覧に入れましょう。故にどうか、我が主よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に・・・」

《ならぬ》

ランサーの熱を帯びた嘆願を非情に断ち切り、ランサーマスターはよりいっそうに冷やかにサーヴァントが逃れることが出来ない命令を下す。

《ランサー、バーサーカーと共にセイバーを殺せ。令呪をもって命じる》

令呪。その意味を理解する者全員が、その場の空気が凍りつくのを感じた。

サーヴァントに対する三度の絶対命令権。そしてそれを使用されて命じられたランサーにはもはや自由意思はない。

セイバーは視界の中で、ランサーの槍が反転するのを目撃し、素早くその場から飛び退いた。

同時にランサーの槍がセイバーがいた場所を擦過し空を切った。

「ランサー・・・ッ!！」

ランサーに呼びかけようとセイバーはするが、途中で言葉に詰まった。

セイバーに向き直ったランサーの顔は、怒りと屈辱に歪みきった悲痛きわまりない状態だった。

それだけで英霊ディルムツドの心中は理解出来るが、令呪に束縛されたランサーにはどうすることも出来ない。

ただ命令通りにバーサーカーと共闘して、セイバーを殺すしかないのだ。

そんなランサーの傍らに、半分ほどの長さになった鉄柱を長剣のように構えたバーサーカーが並ぶ。

まさしくセイバーは絶対絶命。左手のハンデがあるだけではなく、ランサーまで敵側に回ってしまった。

「セイバー……すまん」

「…………アイリスフィール、この場は私が食い止めます。その隙に…………せめて貴女だけでも離脱して下さい。できる限り遠くまで」

セイバーは淡々とアイリスフィールに向けて目配せを行いながら、目の前に立って圧倒的な脅威に静かな眼差しで見据えた。

このままではアイリスフィールも確実に死んでしまう。故に誇り高きセイバーは自らの命と引き換えに活路を拓こうとする。

その問いにアイリスフィールが答えようとした瞬間、バーサーカーがセイバーに向かって疾駆する。

「■■■■■■■■ッ!!」

「セイバーッ!!」

「クッ!!」

アイリスフィールの悲痛な叫びに、セイバーはバーサーカーに対して剣を構え、次の瞬間、バーサーカーは背後に向かって吹き飛んだ。

ーードゴオンッ!!

「■■■■!？」

「・・・・えっ？」

「なっ!？」

目の前で起きた光景にアイリスフィールは疑問の声を出し、セイバーは自身が目撃した光景に驚愕した。

それはランサーも同様だった。彼も目撃していたのだ。バーサーカーが吹き飛ぶ直前にセイバーとバーサーカーの間に入り込んだ蒼い閃光を。

そしてバーサーカーを吹き飛ばした張本人は、振り抜いた左拳をゆっくりと腰あたりに移動させながら右手に握っている刀身までも黒く染まった刀を、ランサーと起き上がろうとしているバーサーカーに向かって構える。

ーースチャッ!

「気に入らないやり方故に、ランサーの代わりに私が助力させて貰うぞ、セイバー」

そう不敵な笑みを浮かべながら、フリートは背後で呆然としてい

るセイバーに声を掛けるのだった。

「・・・・・・・・又ウ・・・・少し出遅れてしまった」

フリート同様にセイバー達の戦いに介入しようとしていたライダーが、自身の戦車の手綱を所在なさげに握っていた。

第三話 集結（後書き）

今回使用宝具

名称：《竜巫女より生まれし笛》

ランク：A++

分類：対城宝具

詳細：異世界の竜が住むアルザスの竜を使役することが出来る宝具。本来の持つべき巫女が使用すれば、アルザスに住む竜を全て召喚することが可能なのだが、フリートでは契約している竜のみ。とある異世界移動の技術も組み込まれているので、例えば異世界でも竜召喚は可能。

第四話 魔剣

その場にいる全員がセイバーを守るように立ち、バーサーカーとランサーに向かつて黒塗りの刀を構えているフリートの姿に困惑を隠せなかった。

誰もがこの場において、キャスターのサーヴァントであるフリートの参戦は有りえないと思っていた。

フリートのクラスは魔術師のキャスター。

故にランサーのマスターで在るケイネス同様に、自身に利益がないこの場では動くはずがないと思っていた。

だが、今フリートはセイバーを守るように立ち塞がっている。

「・・・何故？私を守るのですか？キャスターの貴女が？」

「フム・・・理由は至極簡単だ。ランサーのマスターの行動は、ハッキリ言って私に取って不利益しかない。だから、参戦したのだ」

「何？」

セイバーはフリートの言葉の意味が分からなかった。

しかし、実際にケイネスの行動はフリートに取って不利益どころか、一部を除いて有害でしかない。

今しばらくはサーヴァントとは誰一人として欠けて貰う訳にはいかない。故に初戦でセイバーが消えるなど、フリートに取っては在ってはならないことなのだ。

（セイバーが消滅したら、折角回収していたセイバーの髪や血が消滅してしまう。そんなことを許せるか！）

フリートがセイバーの助力を行った一番の理由は、回収していたセイバーの髪や血液を守る為だった。

サーヴァントは完全に消滅しないかぎり、身体から離れた部分―髪の毛や血液―はその場に留まる。だが、その髪の毛や血液の持ち主であるサーヴァントが完全に消滅すれば、同時にそれらも魔力に変わって消滅してしまうのだ。

そんなことを例え性格が変わっていてもフリートが許す筈がなかった。

「聞こえているか？ランサーのマスター。貴様の行いは、ハッキリ言っただけに取って有害以外の何ものでもない。今すぐにランサーを退かせるならば、無駄な労力を使わずに済むぞ？」

《それは私のセリフだ、最弱のサーヴァント。貴様の邪魔さえ無ければ、セイバーを打ち取れていたと言うのに》

「セイバーを打ち取れていた？・・・なるほど、確かに」邪魔さえ入らなければ、セイバーを打ち取れていたかもしれんな。だが、その後はどうなっていたと思っただけ？」

《何？》

「よもや貴様、理性を失っているバーサーカーがセイバーを協力して倒してくれたランサーに感謝するとも思っていたのか？そんな筈が在るまい。この場では確かに退く可能性は在るが、次は確実にランサーを打ち取りにバーサーカーは動く。つまり、万全の状態ではバーサーカーは再び現れる。あのアーチャーの常軌逸した攻撃を、”無傷”でぐぐり抜けたバーサーカーが万全の状態で」

《ッ！！》

フリートが告げた事実隠れているケイネスが、息を呑む気配が空気から伝わってきた。

「視野が狭過ぎるな。戦いとは一度や二度ではない。ましてや、この争いは戦争だ。短期ばかり見ていては勝てる訳がない。既にセイバーは宝具を使用出来ない。ならば、この場ではバーサーカーをランサーとセイバーの二人がかりで攻め、ランサーの力でセイバー同様にバーサーカーに回復が不可能な傷を負わせれば良かったのだ。まさか、自分が召喚した英霊の力も把握していなかったのか？だとしたら、貴様は戦う者としても探求者としても”三流”だ」

《ッ！！き、貴様！？》

「それ以上の我が主の侮辱は許さんぞ、キャスター」

フリートの言葉にケイネスが怒りを露わにしようとした直前、両手に握る二槍をフリートに向かってランサーは構えた。

「それ以上の我が主の侮辱を許すと思っているのか？」

「侮辱だと？・・・ランサー、私はこれでもかなり怒っているのだぞ。何せ貴様のマスターの馬鹿な令呪の使い方のせいで、”バーサーカーを労せずして倒せる千載一遇の好機が消えたのだから”」

「何！？それは一体どう言う・・・」

「■■■■ッ！！」

――バキイイイン――！

《ッ――！》

バーサーカーの叫びと共に響いた、何が割れ砕ける音にフリートを除いた全員がバーサーカーに目を向けた。

そして目を向けられたバーサーカーはゆっくりと自身の両腕を確かめるように動かし、更に高まった殺意の波動をセイバーだけではなく、フリートにも向ける。

バーサーカーのその様子にフリートがバーサーカーに対して何かを行っていたのだとその場にいる全員が悟り、フリートは自身がバーサーカーに仕掛けたこと簡潔に話す。

「先ほど殴り飛ばした時に、バーサーカーの両手に強力な縛りを施しておいた。先ほどの砕ける音はその術をバーサーカーが破壊した音だ。つまり、バーサーカーはそれまで一切両手が使えなかったと言ったことだ」

「なッ！？それでは！？」

「そう。バーサーカーの宝具の起点は両手の籠手。両手が使えなければ、その力は全く使えない。私の術で両手が使えなかったバーサーカーは、あまり労力を使わなくて倒せた筈なのだが」

言葉と共にフリートは意味深な視線をランサーに送り、セイバーは何故フリートがバーサーカーに対して追撃を行わなかったのかを悟った。

令呪によってランサーはバーサーカーの援護を命じられてしまっている。当然ながらランサー自身にも被害が及ばない限り、バーサーカーの援護にランサーの身体は勝手に動くだろう。

つまり、フリートが作り上げたバーサーカーをあまり労せずして倒せる千載一遇の機会が、ケイネスが使用した令呪のせいで失われてしまったのだ。

「大方セイバーのステータスを見て判断したのだろうが……下らん。敵の宝具を奪える能力を持ったバーサーカーこそが一番の脅威だ。みすみす逃したな。得体の知れない存在を、簡単に討ち取れたチャンス。フッフッ」

「……おい、ライダー」

「ああ、余にわかつとる、坊主……あのキャスター……涼しい顔をしとるが……よほど内心ではランサーのマスターに対して怒つとるみたいだわなあ」

さしものライダーも、徹底的にケイネスのプライドをボコボコにしているフリートに、冷や汗を隠せなかった。

その場にいる誰もが悟っていた。

「フリートがバーサーカーに対して行った縛りは、ケイネスのプライドをボコボコにする為だけに行った」と言う事実。

確実に今頃はケイネスの顔は怒りと屈辱に歪んでいると、弟子だったウェイバーは確信する。

それを肯定するように凄まじい怒気が放たれる。

《ランサーッ！！そこにいる無礼者も討ち取れッ！！》

「はッ！！」

（フッ。自らのプライドに固執している奴は、余りにも手応えがない）

ケイネスの指示にフリートは内心で喝采を上げた。

全て自身の思惑通り。後は当初の予定通りに進めるだけ。

そうフリートは思いながら、右手に握っている刀を構え直し、背後にいるセイバーに声を掛ける。

「そう言うことだ。ランサーは私が押さえる。バーサーカーの相手は頼むぞ」

「……分かりました。此処は貴女への貸しにしておきます。ですが、ランサーの槍は」

「重々承知している。安心しろ。この身を屈伏させられるのは、生前共に過ごした者達だけだ！」

「ーードンッ!!」

叫ぶと同時にフリートはランサーに向かって飛びかかった。

その動きランサーは素早く右手に握る長槍を構え、神速の突きを放つ。

「はッ!!」

「フッ!!」

「ーーギイイイン!!」

ランサーの神速の突きを、フリートは右手に握った刀で受け流した。

その時にフリートに生まれた左側の隙に向かって、ランサーは左

手に握っていた短槍をなぎ払う。

「貰った！」

「――ガキイイイン！！」

「なっ！？鞘だと！？」

ランサーの短槍がフリートに届く直前、フリートは左腰に差ししていた鞘を素早く抜き取り、短槍を弾いた。

そのまま二刀流のように両手に握った刀と鞘をフリートは持ち直し、ランサーと攻防を繰り返す。

フリートとランサーの戦いを離れたところから見ていたウェイバーとアイリスフィールは、ランサーと互角に戦っているフリートの技量に唖然とせざるえなかった。

キヤスターのクラスは、そうじて肉弾戦の技量は低いはず。だが、そのキヤスターである筈のフリートが、ランサーと互角の攻防を繰り返している。

「・・・こりゃあ、余も見誤っておったわ。竜なんぞに乗ってキヤスターを名乗っておったから、てつきり竜を支援して戦う奴だと思っておいたら・・・中々に接近戦もこなしておる」

ライダーの呟いた言葉は、ウェイバーとアイリスフィールも同じ思いだった。

竜と言う幻想種を従えているばかりか、接近戦までフリートはこなしている。

死角が見えないとウェイバーが頭を悩ませていると、フツと先ほどまでフリートの肩に乗っていたモノが消えていることに気がつく。

「アレ？・・・そう言えば、あの竜はどこに行ったんだ」

「モオ～モオ～」

「キュル」

「ん？」

聞こえてきた二つの鳴き声に、ウェイバーが戦車の先の方を見てみると、牡牛の一頭の頭の上に乗っている竜を発見する。

「キュル、キュキュル？」

「モオ～モオ～オオ～」

「キュル」

「オオ！？坊主見る！ゼウスの子らと、竜の間に友好が生まれておるぞ！」

（いや、何か凄まじく違う気がする）

ウェイバーは何故か分からなかったが、ライダーの言葉は間違っていると確信していた。

二頭の牡牛と竜は、友情を結んでいると言うよりも、互いの主人の愚痴を言い合っているような印象をウェイバーは感じる。

何故か遠からず自身も種族の差を踏み越えて、あの輪の中に入ってしまうような未来が待っていると、ウェイバーの中の何が囁くが、そんな未来はごめんなので現実に目を戻す。

フリートとランサーの攻防は、相変わらず一進一退だった。

隙あらば互いに攻撃を繰り返し、それを防いでいる。少なくとも武器を使った戦いは互角にしかウェイバーには見えなかった。そう武器を使った戦いだけならば。

「祖は銀雪。穿つは槍」

（馬鹿な！？これだけの攻防をしながら詠唱だと！？）

聞こえてきた詠唱にランサーは驚愕せざるえなかった。

魔術の発動には精神集中が必要。大規模な魔術で在れば在るほどに、発動させる為には尚更にそれに精神集中が必要な筈。

しかし、今フリートはランサーと攻防を繰り返しながら詠唱を行っている。

本来ならばランサーが攻めきるチャンスของ筈なのだが、フリートの剣は詠唱をしながらも一切鈍りはなかった。

――ダン！

「放たれよ！氷結槍！！」

――ザザザザザザザッ！！

詠唱が完成すると同時にフリートはランサーから距離を取るように離れ、素早く自身の周りに発生させていた氷の槍を撃ち出した。ランサーは迫り来る氷の槍を目撃すると、迷うことなく前に進み出る。

ランサーのクラスにはセイバーのクラスほどではないにしても《対魔力》のスキルが保有される。例えば打ち消せなくても、自身の《破魔の紅薔薇》グレイ・ジャゲルならば、魔力で作れた氷の槍を打ち消せる。

故にランサーは前進を選択するが、次の瞬間、ランサーに迫って

いた全ての氷の槍が碎ける。

「碎けよ！」

——ドントッ！！

「何！？」

フリートの指示通りに碎け散り、視界を埋め尽くすように発生した白い冷気にランサーの視界は遮れ、足が止まった。

《対魔力》と言っても、発生した現象は無効化出来ない。あくまで《対魔力》は、魔力を用いた攻撃にしか作用しない。

ランサーの視界を覆い尽くす冷気を《対魔力》で無効化することも、《破魔の紅薔薇》グレイ・ジャグルで打ち消すことも無理なのだ。

「天鳴る轟雷。 天空より降り注ぎ、我が敵に裁き下せ」

——ゴロゴロッ！！

「まさか！？」

聞こえて来た雷の鳴り響く音にランサーが空を見上げみると、雷雲に向かつて左手を伸ばしながら空に浮かんでいるフリートがいた。そしてそのままフリートは自身を見上げているランサーに向かつて左手を振り下ろす。

「汝の意を知らしめん為に、高き天空より降り注げ！！迅雷！！」

——ピカアアアアン！！

ーードゴオオオオン！！

「……で、天候操作……う、嘘だろう？……ま、魔法の領域じゃないか」

目の前で起きた出来事に、ウェイバーは全身の震えが抑えられなかった。

それは同じ魔術師であるアイリスフィールも同じ気持ちだった。天候を操れる魔術師など現代には存在していない。

更には、空から落ちて来た雷はランサーがいた地点以外に全く影響を及ぼしていない。

完全で天候操作しているフリートの力に、魔術師であるウェイバーとアイリスフィールが言葉を無くしていると、空に浮かんでいたフリートがゆっくりとアスファルトの上に着地する。

ーートンッ

「……今ので決めるつもりだったのだが。最速の名は伊達ではないな、ランサー」

自身が起こした雷の落下地点に目を向けながらフリートが呟くと、吹き荒れていた煙の中から所々に火傷を負いながらも、戦意が全く衰えていないランサーが出てくる。

フリートはその様子を楽しげに眺めていると、ランサーが話しかけて来る。

「……今のは危なかった。まさか、天候を操って雷を引き起こすとは……後一步《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャグルを投げるのが遅かったら、討ち取られていたかも知れんな」

「ど、どういう意味だ、ライダー？」

「……先ほどの雷が落下して来る一瞬……ランサーは避けられぬと判断するやいなや、自身の槍を空に向かって投げおった。それによって一際大きな雷は霧散し、後は威力が劣る小規模な雷だけが残り、ランサーは自身へのダメージを最小限に抑えたのだ」

ライダーが告げた事実にはウェイバーと聞いていたアイリスフィールは言葉が出せなかった。

あのほんの僅か一瞬の間に、それだけの高度な戦いが繰り広げられていた。

直前に視界を塞ぎ、大規模な天候操作を駆使したフリートも、それだけの攻撃を最小限のダメージで逃れたランサーも、共に並みサーヴァントでは無いと二人の戦いを見ていた誰もが理解する。

そしてランサーはフリートの動きを警戒しながら、近くに落ちていた《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャグルを右手に持ち、フリートに向かって構える。

「……スチャッ！」

「恐るべき戦術だったが、俺の《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャグルの前では決定的ではなかったな。更に貴様は左手を自由に動かす為に、鞘を捨てた。もはや、先ほどまでのようには俺との斬り合いは出来まい」

「確かに……正直言っただ少予想を超えていた……やれやれ、出来れば使いたくなかったが、使わざるえないか」

「何？」

フリートの意味深な言葉に、ランサーは訝しみながらフリートを見つめると、フリートは右手に握っていた刀をアスファルトに突き

刺す。

ーートスッ

「さてランサー。私にこれを使わせることを後悔するぞ」

言葉と共にフリートは鎧の中から小刀を取り出した。

その小刀にランサーだけではなく、戦いを見ていたライダー、ウェイバー、アイリスフィールは疑問を抱かざるえなかった。

確か魔力は感じられる。だが、宝具と呼べるほどの魔力は感じられず。かと言って魔力が全く感じられない訳ではない。

一体何なのかとランサー達が疑問を抱いていると、フリートは前に向かって小刀を構え、迷うことなく左手の手の平に深々と突き刺す。

ーードスッ!!

「目覚める。《猛毒の一角》、リアクト」

ーードゴオオオオン!!

《なっ!?!》

小さな声でフリートが呟くと同時に、凄まじい魔力がフリートを中心に吹き荒れた。

その魔力にランサー達が驚愕していると、吹き荒れていた魔力は徐々に薄れ、両手に禍々しい魔力を放っている、長剣と短刀を握ったフリートが立っていた。

「紹介しよう。これが私の宝具。《魔導殺しの双剣》ケーニツヒ・

リアクテッド。ありとあらゆる魔導を否定する剣だ」

「何だと!？」

「さて、長話は終わりだ。時間が迫っている。一瞬足りとも目を逸らすな。逸らせば、お前は死ぬぞ」

「ードンッ!!」

「クッ!」

言葉と共に突進して来たフリートに対して、ランサーは即座に迎え撃つように二槍を構えた。

それに対してフリートは右手に握っている長剣の方のケーニツヒを、ランサーに向かって振り抜く。

「ハアッ!!」

「舐めるな!」

「ーガキイイイン!!」

(何だ!？キャスターの力が上がっている!？)

フリートが振り抜いたケーニツヒを《ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇》で防御したランサーは、伝わって来た衝撃に違和感を覚えた。

先ほどまでよりも、明らかにフリートの力が上がっている。宝具を解放したとは言え、明らかにフリートの力は異常なレベルで引き上がっていた。

そのことにランサーは疑問を抱きながら、フリートが振り抜いて

来る二刀のケーニツヒを防いでいると、フツとフリートが振るっているケーニツヒに魔力が集中している事に気がつく。

「――ゴオオオオオツ!!」

「まさか!?!」

「気がついたか? フツ!!」

「――ガキイイイン!!」

「グウツ!!」

フリートが振り抜いたケーニツヒの一撃によって、ランサーは防御していながらも吹き飛んだ。

しかし、ランサーは空中で態勢を整えると、危なげなくアスファルトに着地し、警戒するようにフリートを睨む。

「……何という厄介な。その剣。大気中に存在している魔力を吸収して強化する剣だな?」

「正解だ。加えて言えば、貴様の持つ《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲル同様に魔力を打ち消す力も宿っている。最もその効力は、”私の周り全体”だから」

《ツ!!》

「何と厄介な剣なのだ。あの剣の握つとるだけで、魔力を用いた攻撃が通じなくなるとは」

流石のライダーも、ケーニツヒに宿る力には唸ざるえなかった。

魔力を用いた攻撃が全て無効化されると言うことは、ライダーの戦車を牽く牡牛が発生させる雷も無効化されてしまう。

ランサーの《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャケルにも、魔力を打ち消す力が宿っているが、その範囲は刃先だけ。

フリートの握るケーニツヒは、その名の通り《魔導殺し》の名が相応しい剣だった。

（厄介な。だが、攻める隙は在る。あの剣は大き過ぎる。懐に入り込みさえすれば・・・）

「ああ、言い忘れていたが、ケーニツヒは・・・・伸縮自在だ」

「ブザンッ！！」

《なッ！？》

フリートがケーニツヒを軽く振り抜くと共に伸びた刀身に、ランサーだけではなくライダー達も目を見開いた。

しかし、ランサーは素早く伸びたケーニツヒの刃を深く腰を沈める事で避け、その背後でセイバーに鉄柱を振り下ろそうとしていたバーサーカーの身体をケーニツヒの刃が深々と鉄柱ごと切り裂く。

「ブザンッ！！」

「■■■■！？」

《なッ！？》

ケーニツヒに切り裂かれたバーサーカーは悲鳴を上げながら、崩

れ落ちた。

その姿にバーサーカーと戦っていたセイバーだけではなく、全員がバーサーカーを切り裂いたフリートに目を向ける。

「フウ……これでバーサーカーは戦闘不能だな」

そのフリートの言葉を肯定するように、バーサーカーは切り裂かれた場所を押さえながらその身を霧散させるように霊体化して、その場から消えた。

それを確認したフリートは、再び辺りに目を向ける。

「さて、これで援護すべき相手は消えたぞ？まだ、続けるか？」

《クツ！…………ランサー、撤退するぞ。今宵は此処までだ》

そのケインスの言葉に、ランサーは安堵の吐息を吐きながら槍の切っ先を下げる。

「感謝する。キャスター」

「私に感謝するのは止めておけ。貴様のマスターを潰す相手だからな」

ランサーはその言葉に僅かに眉を険しくするが、すぐに視線を逸らし、セイバーに視線を向ける。

二人の間には言葉は不要だった。今日の戦いの決着はいずれつけると、理解しているのだ。

そしてランサーも霊体化して、その姿を消失させた。

セイバーはそれを確認すると、戦いを傍観していたライダーに目を向ける。

「・・・結局、お前は何をしに出て来たのだ？征服王」

「さてな。そう言うことはあまり深く考えんのだ」

「じゃすともーめんとぷりーず！？」

ライダーの言葉に叫んだのは、彼のマスターであるウェイバーだった。

「じゃ何か！？お前は色々と言っていたけど！本当は何も考えてなくて！セイバーとランサーの戦いに介入して、他のサーヴァントを呼んだのか！？」

「まあ、そう言うことだなあ」

「ーバタツ

余りの事実にはウェイバーは意識が遠退き、倒れ伏した。

流石にアイリスフィールも今度ばかりはウェイバーに同情せざるえなかった。

一歩間違えば、この場集った全てのサーヴァントを敵に回すような行動が、その場の勢いだっただなどと、知りたくはなかっただろう。

しかし、ウェイバーを気絶させた張本人であるライダーはセイバーに目を向ける。

「セイバーよ。まずはランサーとの因縁を精算しておけ。その上で貴様がランサーか、勝ち昇ってきた方と相手をしてやる。さらばだ」

ライダーはセイバーにそう告げると、二頭の神牛に鞭を入れ、稲妻を散らしながら去っていた。

フリートはそれを確認すると、自身の肩に戻って来た竜を乗せて、セイバーに背を向けて去ろうとする。だが、その前にセイバーがフリートに質問してくる。

「待てキャスター」

「何か用か、セイバー？」

「……貴様、何故バーサーカーを見逃した？」

「何のこ……」

「惚けるな。私に集中し、更にランサーの槍同様に魔力を打ち消す剣を持った貴様ならば、バーサーカーに重傷で終わらせたことは不自然だ。私を助けたことと言い……何を企んでいる？」

「……何れ分かる」

意味深な言葉を笑みと共にフリートはセイバーに告げると、その身を竜と共に霊体化させてセイバーの視界から消え去った。

セイバーは言い知れない嫌な予感を感じる。今回の聖杯戦争で最も警戒すべきなのは、征服王でも、あの黄金のアーチャーでも、得体の知れないバーサーカーでもなく、今自身の前から消え去ったフリートなのではないかと感じながら。

戦闘が在った港場から、僅かに離れた地点に存在するマンホール。

その鉄蓋が揺れ動き、マンホールの中から一人の男性が出て来る。その男性の状態は酷いと言う言葉では足りないほどに、悲惨だった。全身が血まみれで、いたるところで毛細血管が破裂し、重度の放射能被曝者と変わらなかった。

誰が信じるだろうか。彼こそが戦いに乱入して来た得体の知れないバーサーカーのマスターであると。

もはや彼の身体は生物としての限界を超え、死滅しかかっていた。だが、それでも彼には聖杯戦争を降りると言う選択肢はない。

彼の望みを叶える為には、例え血肉の最後の一滴まで燃え尽きる事になっても、聖杯戦争を勝ち残らなければいけないのだ。

「……待つて……いて……くれ……■……必ず……
……君を……」

男性はこの場には居ない誰かに向かって呟くと、壁を支えにしながら立ち上がる。

今夜の戦いで、バーサーカーもかなりのダメージを負った。

ひとまずは休息しようと、彼は歩き出し、暗がりから飛んで来た注射器が彼の首に突き刺さる。

——トスッ！

「……アッ？」

一瞬彼には自身の首に突き刺さる注射器が、何なのか分からなかった。

そして彼の意識は遠退き、意識が完全に途切れる前に彼が最後に見たは、白衣を着た蒼い髪の女性だった。

第四話 魔剣（後書き）

今回使用宝具。

名称：《魔導殺しの双剣》ケーニッツ・リアクテッド

ランク：A

分類：対軍宝具

詳細：ありとあらゆる魔導を分断してしまふ魔導殺しの双剣。持つだけで、魔力を用いた攻撃は無効化してしまうのではなく、フリートの改造によって、分断した魔力が大気中に漂っている魔力を刀身に吸収し、斬撃の威力を向上させる機能が追加されている。

また、ランサーの《破魔の紅薔薇》ゲイ・ジャゲル同様に魔力によって創られた防具などは無効化してしまう。更に刀身は伸縮自在であり、剣から放たれる砲撃は《対魔力》のスキルでは無効化出来ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2904y/>

漆黒、恐怖、電子、特別編

2011年11月17日07時26分発行